The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	受身文からみる日本語と中国語の談話構成の特徴 ：中日・日中対訳データに基づいて
Author(s)	陳, 冬姝
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 127-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59669
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

受身文からみる日本語と中国語の談話構成の特徴
―中日・日中対訳データに基づいて―

陳冬姝

1. はじめに

（1）a. 妈妈：刚才啊，医生　又　开　了　些　营养药，我　没有
さっき　医者　また　処方する　完了を表す　量詞　栄養剤　私　否定を表す
让　护士　到　药房　去取。
使役を表すマーカー　看護婦　到着点を表す　薬局　取りに行く

b. お母さん：（私たちは）さっき栄養剤を処方されたけど、買わなかったわ。

（『五星大饭店』）

（2）a. 紗和：滝川さんと友達じゃありません。（私は）頼まれて、そう言いました。

b. 纱和：我 和 泷川 并　不是　朋友，她 拜托 我，我　才　这么　说的。
私　と　滝川　別に　ではない　友達　彼女　頼む　私　私　してはじめて　このように　言ったの

（『昼顔』）

（1）と（2）はそれぞれ中日対訳と日中対訳[1]のテレビドラマの会話から抽出した例である。いずれも中国語は三人称主語の能動文で表現しているのに対し、対応する日本語のほうは一人称主語の受身文になっている。

本稿は（1）と（2）のような例を取り上げ、「日本語の受身文と中国語の受身文との非対応は談話（discourse）上の理由による」という観点から、受身文から日本語と中国語の談話構成の特徴について分析を試みる。

2. 先行研究

談話とは、「いくつかの文が連ったもので、全体として一つのまとまった内容をもっており、これが効果的に相手に伝わるためには、中心となるテーマがあり、それに沿って各文が有機的につながることによって文から文への流れがスムーズになっていなくてはならない」（福地 1985：11）とされる。文を作るために文法が必要なように、談話を構成するためにも談話の規則が必要である。その規則に関連して、久野（1978）は「視点」という概念を提出している。視点というのは、ある事態を描写する際、話し手がどこにカメラを置いてその事実をとらえているかということである。日本語の受身文について、久野は、「受身文では、わざわざ行為主体を主語の位置から外し、行為対象を主語の位置にすえるのであるから、話し手は、この構文パターンを用いる時は、何か特別な理由、即ち、行為対象に

対する視点的な接近がなければならない」（久野 1978 : 163）との主張を行っている。また、工藤（1990）は、日本語について、受身文にするのは、単純に受け手を主語にするだけではなく、行為者の背景化と結果の前面化も連動してくると指摘している。即ち、受身は文法的な問題だけではなく、話者が何に視点を置いて叙述するか、またこのような視点の置き方によって話者が何を伝達するか、談話構成にどう貢献できるかという「談話」や「視点」という問題にも関わっている。

一方、中国語の場合、視点がどこに置かれやすいかについて、日本語ほど統一的な見解があるわけではないが、渡邊（2000）では「話者が誰を見ているかという＜注視点＞については、…（中略）…受け身文の場合は認知的に卓立した部分として主語の位置に来る被動作主を＜注視点＞とする」（渡邊 2000 : 220）と述べられており、杉村（2016）でも、一人称が動作主になる中国語の受身文について、話し手がどのように事態を見ているのかという話者の視点と関わっている構文であると主張しており、話者が動作主よりも被動作主に対して関心を持つために、被動作主を主語に昇格したのだと述べられている。以上の先行研究から、中国語の受身文においても主語を視点の置かれる位置として想定するのが妥当であると考えられる。

このように、日本語と中国語には「談話」と「視点」について共通する側面があるにもかかわらず、日本語における受身文の研究が「談話」「視点」という観点から多くなされているのに対して、日中対訳データに基づく受身文の研究では、そのような側面から十分な検討がなされていると言えない。

陆（2004）と飯嶋（2007）はいずれも日中対訳データに基づき、日本語の受身文に対応する中国語表現を調査した。その結果、陆（2004）は日本語の受身文に対応する中国語表現は、「意味受動文」「能動文」「被字句」の順で減少していくということを明らかにしているのに対し、飯嶋（2007）は日本語の受動文が中国語の受動文に対応する割合は低く、能動文に対応する割合が高いという陆（2004）とは異なる結果を得ている。しかし、これらの研究は、いずれも小説もしくは論説文のデータを取り上げ、日本語の受身文と中国語との対応パターン、あるいは中国語の「“被”構文」と日本語との対応パターンを考察することにとどまり、その対応関係からさらに何がわかるのかについては詳しく議論されていない。

本稿は小説データではなく、テレビドラマにおける中日対訳・日中対訳の会話データを取り上げる。そのデータを基に、日本語の受身文と中国語との対応関係を分析した上で、日本語の受身文と対応する中国語の文の主語がそれぞれ「一人称主語」「二人称主語」「三人称主語」「無情物主語」あるいは「不定の主語」のいずれであるかに関して調査を行う。そして、この調査結果を踏まえて、日本語の一人称主語の受身文と対応する中国語の能動文の例を中心に、なぜ日本語では受身文が用いられているのに中国語では能動文になっているかという問題に対して、両言語の談話構成の違いという観点から解決を与える。

3. 調査

3.1 調査方法

本稿では、調査 1 と調査 2 の二つの調査を通して日本語の受身文とそれに対応する中国語表現を見ていく。調査 1 ではテレビドラマの会話文の中日対訳データ、即ち中国語の原文とその日本語訳のデータから、日本語訳の受身文（字幕）とそれに対応する中国語原文の表現（音声）を文字化してデータを収集した。調査 2 ではテレビドラマの会話文の日中対訳データ、即ち日本語の原文とその中国語訳のデータから、受身文（音声）と中国語訳文（字幕）を文字化して用例を採集した [2]。調査 1 と調査 2 のデータの概要は以下の表 1 にまとめられる。

表 1　データの概要

	データの出典	データ量	受身文の用例数
調査 1	『五星大饭店』	合わせて 30 話 約 1344 分	132 例
調査 2	『最高の離婚』 『昼顔～平日午後 3 時の恋人たち～』	合わせて 14 話 約 691 分	177 例

上のデータに基づき、調査 1 と調査 2 ではいずれも以下の内容について考察を行った。

① 日本語の受身文が中国語のどの構文と対応しているのか。

② 人称分類の観点から、日本語の受身文の主語は中国語ではどのように反映されているのか。

3.2 調査結果

3.2.1 日本語の受身文と中国語の構文との対応

調査 1 と調査 2 では、日本語の受身文に対応する中国語訳を、「能動文」、「“被”構文」、「語彙レベルの受身文」、「意味上の受身文」、「使役文」及び「その他」という六つのパターン [3]に分類し、各パターンにおける割合を算出した。調査 1 と調査 2 の結果をグラフ化したものを図 1 で示す。

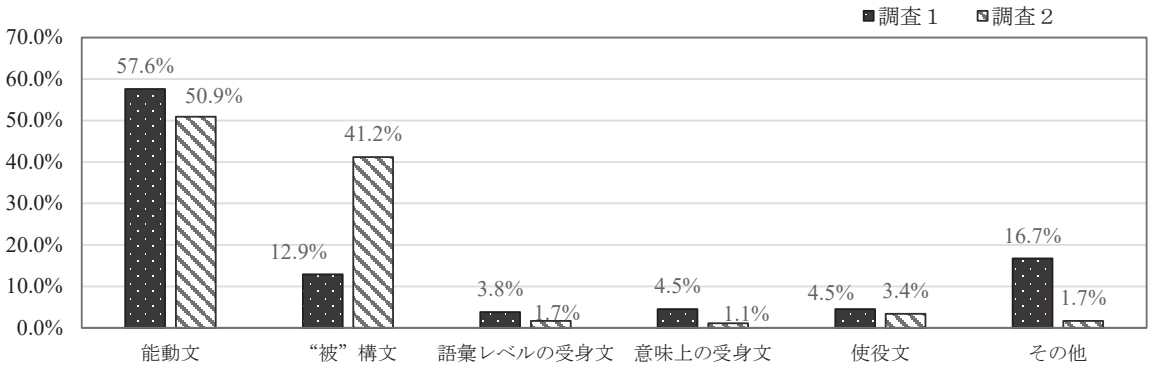

図1 日本語の受身文に対応する中国語の構文

上の図 1 で示しているように、いずれの調査でも、日本語の受身文に対応する中国語表現のうち、半数以上が能動文であった。また、「“被”構文」の割合を見ると、調査 1 のほうは調査 2 より明らかに少ないということがわかる。言い換えれば、日本語の受身文から中国語の「“被”構文」に訳された文の数は、中国語の「“被”構文」から日本語の受身文に訳された文の数よりも明らかに多いということである。その原因としては、翻訳者が日本語の受身文を直訳的に中国語の受身文に訳している可能性、あるいは、そもそも中国語では「“被”構文」が使われることが少ない可能性が考えられる。

3. 2. 2 日本語の受身文と中国語の構文における人称分類

本節では、調査 1 と調査 2 における日本語の受身文とそれに対応する中国語の文の主語がそれぞれ「一人称主語」「二人称主語」「三人称主語」「無情物主語」あるいは「不定の主語」[4]のいずれであるかによって分類を行い、各人称主語における用例数と割合を算出した。なお、本調査で扱う「三人称主語」は「彼」「彼女」といった有情物の主語であり、主語が無情物になる場合は「無情物主語」として分類されている。表 2 は調査 1 と調査 2 における日本語と中国語の主語を分類した結果をまとめたものである。括弧で示している割合は小数点以下第 2 位を四捨五入した数値である。

表 2　日本語の受身文とそれに対応する中国語の主語の分類

	一人称主語	二人称主語	三人称主語	無情物主語	不定の主語
調査 1 （中国語）	❶ 4 （3.0%）	13 （9.8%）	❸ 60 （45.6%）	46 （34.8%）	9 （6.8%）
調査 1 （日本語訳）	35 （26.5%）	13 （9.9%）	25 （18.9%）	59 （44.7%）	0 （0.0%）

調査 2 （日本語）	❷ 97 （54.8%）	36 （20.3%）	29 （16.4%）	15 （8.5%）	0 （0.0%）
調査 2 （中国語訳）	44 （24.8%）	40 （22.6%）	❸ 67 （37.9%）	20 （11.3%）	6 （3.4%）

表 2 の❶で示しているように、中日対訳データに基づく調査 1 では、一人称主語の割合は中国語 3.0%から日本語 26.5%へと増加している。その一方、❷で示しているように、日中対訳データに基づく調査 2 では、日本語の受身文は一人称主語の割合が最も多かったが、中国語に訳された際、一人称主語の割合は日本語 54.8%から中国語 24.8%へと減少している。これは、一人称を主語に立てるということが日本語の受身文の使用に関して重要な役割を担っているからだと考えられる。一方、❸で示しているように、中国語の訳文でも、中国語の原文でも、三人称を主語とする文の数が最も多かった。

以上の図 1 と表 2 で示した結果から、以下の二つの問題点が指摘できる。

a) 日本語の受身文のうち、約半数が中国語の能動文に対応しているということは何を意味するのか。

b) 一人称を主語に立てる傾向は日本語の受身文の使用動機に関係しているのか。

次節では、この二つの問題点を解決するために、中国語の能動文に対応する日本語の一人称主語の受身文を中心に分析を行う。

4. 分析

4. 1 中国語の能動文から日本語の受身文に訳された例

本節では調査 1 における中国語の能動文から日本語の一人称主語の受身文に訳された例を中心に、日本語の談話上の特性を考察する。それぞれの例文では、波線と太字で受身文の主語を表し、下線で日本語の受身表現とそれに対応する中国語表現を表している。本来の会話で主語が明示されていない場合には、丸括弧で主語を補足している。

結論を先に言えば、中国語の能動文を日本語の受身文に訳す理由は、「自己の視点の明示」と「視点の一貫性の維持」という特性が日本語の談話構成において働いているためである。これらの特性を具体的に構文に反映させると、前者によって一人称が主語に立ち、後者によって主節と従属節の主語が一致するということになる。

例えば、以下の（3）は中国語原文の「不定の主語」の能動文から日本語の一人称主語の受身文に訳された例である。例（3）の「有人告诉我」を直訳したのが（3’）a である。（3’）b は実際の日本語訳である。

（3）a. 潘玉龙：何总， 从 我 第一天 学习 酒店管理 的 那一天 起， 就 不断

何社長、起点を表す 私 初めて 学ぶ ホテル経営 の その日 から、 接続詞 ずっと

有人 告诉　我，酒店，应该　　是　　客人 最安全，　最舒适，
ある人　教える　私、ホテル、　べきである　肯定を表す　お客様　最も安全、　　最も快適、
最　自由　　的　　家。
最も　　自由　連体修飾マーカー　家

b. 潘玉龍：（私は）ホテル経営を学び始めてからずっとこう言われてきました。ホテルは最も安全で快適で自由な場所であるべきだと。

（『五星大饭店』）

（3’）a. ある人が私にこう言いました。[5]

b.（私は）ずっとこう言われてきました。

（3’）からわかるように、中国語では「有人（ある人）」が主語に据えられているが、日本語訳では主語が「私」になっている。

ここで 3. 2. 2 節における表 2 の結果をもう一度取り上げたい。即ち、日本語の会話文においては、受身文の主語を一人称にしようとする傾向がみられるが、中国語にはそのような傾向がみられないという点である。これは、久野（1978）、森田（1995，2006）における「視点」という概念に基づいて説明できる。久野（1978）は視点の観点から「話し手は、常に自分の視点をとらなければならず、自分より他人寄りの視点をとることができない」（久野 1978 : 146）と主張しており、また、森田（1995，2006）は社会言語学の観点から日本語の受身文について説明し、日本人は常に自己の目を持って、自分に視点を置いて、外の世界に起きたことを眺めようとしており、その反映の一つが日本語の受身文に見られる、と指摘している。

つまり、日本語において、話し手は「ある人」という不定の人称より、一人称の「私」に共感しやすいと考えられる。そのため、（3’）a のような不定の人称が主語となる能動文よりも（3’）b のような一人称主語の受身文に訳されやすい。それに対して、中国語では、「私」を常に注目の的として、そこに視点を置くというような意識は日本語ほど強くない。そのため、「ある人が私にこう言った」という出来事に対して、わざわざ動作者の「ある人」を主語の位置から外し、被動作者の「私」を主語に据えるよりも、そのまま不定の人称を主語として能動文で表現するのが最も自然である。したがって、一人称を主語に立てるということが日本語の受身文が使用される要因の一つだと考えられる。次の（4）～（6）の例文はすべて中国語の三人称もしくは二人称主語の能動文から日本語の一人称主語の受身文に訳された例である。

（4）a. 老刘：很多　记者　跟　我　打听　你们　呢。
多い　　記者　に　私　聞く　君たち　語気詞

b. 老劉：（私は）記者に聞かれたよ。

（『五星大饭店』）

（5）a. 老刘：将来　糖果酒吧　请　咱们　回来，咱们　还　不回来　了呢。
これから　キャンデーバー　招く　私たち　戻ってくる　私たち　それでも　来ない　語気を表す

b. 老劉：（私たちは）ここには呼ばれたって、もう来ないな。

（『五星大饭店』）

（6）a. 杨悦：从现在开始，我们　之 间　谁也　不　欠　谁的了，如果
今から始まる　私たち　の　間　誰も　なし　借りる　誰なの　もし

你　还　对我　这么好，　就　该我　欠　你　的了。
あなた　依然として　私に対して　こんなに優しい　副詞　私の番　借りる　あなた　のだ

b. 楊悦：これからは、お互いに借りは無しよ，（私は）これ以上優しくされると、私が借りを作ってしまう。

（『五星大饭店』）

つぎに、「視点の一貫性」が影響している例を見ていく。（7）では a の「我只需要有一个人爱我」を直訳すれば、（7’）a のような文になる。（7’）b は実際の日本語訳である。

（7）　a. 金志爱：我　没有办法 改变　这个 世界，现在，我　只　需要　有一个人
私　方法がない　変える　この　世界　現在　私　ただ　必要する　ある一人

爱　我，对　我　诚实，　让　我　有 安全感，那就　够　了。
愛する　私　対して　私　誠実　使役を表す　私　ある　安心感　それで　十分　副詞

b. 金志愛：私にはこの世界を変えられない。私はただ一人の人に愛されたいだけ、誠実で、安心をくれる人に、ただそれだけでいいの。

（『五星大饭店』）

（7’）a. 私はただある一人が私のことを愛するのを必要とする。

b. 私はただ一人の人に愛されたいだけ。

つまり、中国語では主節の主語は「私」であるが、従属節では「ある一人」が主語になっている。しかし、日本語訳の場合、（7’）b のように受身文に訳されており、「愛される」の主語（「私」）と、「～たい」の主語（「私」）が一致している。

久野（1978）は「視点の一貫性」[6]という概念を提唱し、それが文ごとに独立して適用されるだけではなく、「従属節＋主節」という複文全体にも適用できると論じている。また、中川（1997）は因果関係を持つ日本語の複文を取り上げ、主節が受身文の場合、「主節と条件節では視点が一貫していなければならない」という原則が強く働いている、と指摘している。例（7’）a のように、中国語では、主節と従属節の主語が一致していなくても文として自然に成り立つが、日本語では、（7’）b のように、主節と従属節の主語が一致する方がより自然と考えられる。これらのことから、訳者は主節と従属節の主語を一致させるために、受身文に訳しているのだと考えられる。

次の（8）もこれに該当する例である。

（8）a. 工作人员：金志爱 现在 疑心 很 大，韩国 一家报纸 曾经 报道， 她 在 她
金志愛 現在 猜疑心 とても 大きい 韓国 ある新聞 以前 報道する 彼女 介詞 彼女
父亲 去世之后，曾经 向人 透露， 说 有人 要 谋杀 她。
父親 死後 かつて 人に対して 漏らす 言う ある人 するつもりだ 殺す 彼女

b. スタッフ：彼女は猜疑心の塊で、ある新聞によれば、父親の死後、自分は誰かに殺されると言っていたようです。

（『五星大饭店』）

（8’）a. 彼女は誰かが自分を殺そうとしていると言った。

b. 自分（彼女）は誰かに殺されると言っていたようです。

（8）a の「（她）说有人要谋杀她」の中国語を直訳すれば、（8’）a のようになる。つまり、中国語では主節の主語「彼女」と従属節の主語「誰か」が異なっている。一方、日本語訳では（8’）b のように訳されており、「言っていた」の主語も「殺される」の主語も「彼女」であり、主語が一貫している。このように、「視点の一貫性」を保つということが日本語で受身文が使用されるもう一つの要因だと考えられる。

以上のことから、話し言葉においては、日本語の受身文を使用する際に、以下の（ア）（イ）という二つの要因が働いていると考えられる。

（ア）一人称の「私」を主語に立てる傾向（自己の視点の明示）

（イ）主節と従属節の主語を一致させる傾向（視点の一貫性の維持）

4.2 日本語の受身文から中国語の能動文に訳された例

本節では調査 2 における日本語の一人称主語の受身文から中国語の三人称主語の能動文に訳された例を中心に、両言語の談話上の特徴を見ていく。

以下の（9）と（10）はいずれも日本語では一人称を主語とする受身文で叙述されているが、中国語では三人称を主語とする能動文に訳されている。

（9）a. 濱崎光生：じゃあ、何で婚姻届書いたんですか？

上原諒：（私は彼女に）結婚したいって言われたので。

b. 滨崎光生： 那 当初 干嘛 写 结婚申请表 啊。
前節を承ける代詞 当時 どうして 書く 婚姻届 語気詞

上原谅： 因为 她 说 想 结婚。
理由を表す接続詞 彼女 言う したい 結婚する

（『最高の離婚』）

（10）a. 加藤：私は人の女房を好きになるほどバカじゃありません。そもそも（私は彼女に）むりやり誘惑されただけです。

b. 加藤：我　不是　会　喜欢上　别人老婆 的　蠢货。本来　就是　她
私　ではない　副詞　好きになる　人の女房　の　バカ。そもそも　肯定を強調する　彼女

主动　勾引　我。
積極的に　誘惑する　私

（『昼顔』）

（9）は、「上原諒」という人物が婚姻届を書いたものの、市役所に出さなかったという状況のもとで「濱崎光生」に責められている場面である。「濱崎光生」の非難に対して、「上原諒」は「結婚したいって言われたので」と受身表現で発話し、「僕は能動的に結婚したいのではなく、結婚したいと言われたのを受動的に受け入れただけだ」という気持ちを表している。それに対して、中国語訳ではそのようなニュアンスを表すために、「“被”構文」ではなく、能動文に訳しているのである。つまり、「因为她说想结婚」という能動文を用いることで、「僕が結婚したいのではなく、彼女が一方的に結婚したいと言ったから、僕のせいじゃないよ」という気持ちを表している。（10）は（9）と同様に、日本語では「私は彼女に誘惑された」と受身文で表現し、話し手の「僕は能動的に彼女を誘惑するのではなく、受け手として誘惑されたのだ。僕がしたくてそうしたんじゃないよ」という意味を表している。それに対して、中国語ではこのようなニュアンスが表せない「“被”構文」ではなく、「她主动勾引我」と能動文に訳されている。そこから話し手の「僕が彼女を誘惑するのではなく、彼女が私を誘惑したのだから、僕が悪いのではない」という意味が読み取れる。同じ一つの事態で、同じ話者の気持ちを表している場合であっても、受身文を選ぶか能動文を選ぶかにおいては、日本語と中国語は異なっているということが言える。

仮に、（9）a と（10）a を中国語の「“被”構文」に直訳すれば、下の（9’）と（10’）のような文になる。

（9’）＊ 因为　我　被　她　说　想　结婚。
理由を表す接続詞　私　受身を表すマーカー　彼女　言う　したい　結婚する

（10’）？ 本来　就是　我　被　她　勾引　的。
そもそも　肯定を強調する　私　受身を表すマーカー　彼女　誘惑する　の

（9’）のように、（9）a のような受身文を中国語の「“被”構文」を用いて描くことはまずありえない。また（10’）も中国語としてはやや不自然に思われる。

木村（1992）は中国語の受身文について、「主語に立つ対象が単に＜動作・行為＞を受けることを述べるだけでは成立し難く，対象が動作・行為の結果として被る何らかの＜影響＞を明示的に表現するか，あるいは何らかのかたちでそれを強く含意するかたちのもので

なければ成立し難いという性格をもっている」（木村 1992：10）と指摘している。この説に従えば、上の（9’）のような中国語が成立し難い理由は明白である。つまり、中国語の「“被”構文」が成り立つ条件の一つは、被動作者が行為の結果として被る何らかの影響を明示的に表現するということである。(9）a の「言われた」の「言う」という動詞は中国語の動詞の「说」に対応しているが、(9’）のように中国語の「“被”構文」に訳すと、「被～说」という文は被動作者が被る何らかの影響を明示的に表現していないため、成立し難い。さらに前節でも述べたように、中国語は日本語と異なり、常に「私」に視点を置く傾向が強くない。そのため、三人称の「她」を主語に据え、一人称の「我」を目的語にして能動文で訳すほうがむしろ自然である。

ただし、(10）a では「誘惑する」というマイナスな意味を持つ述語が用いられているので、中国語の「“被”構文」に訳しても文法的な許容度が低くないと思われる可能性もあるが [7]、「僕のほうからではなく、彼女が誘惑してきたのだ」というニュアンスを表すには (10) b のような三人称主語の能動文に訳すのが最も自然であると感じられる。

次に、表 2 の結果、即ち調査 2 では日本語の一人称主語の数が最も多いということを念頭に置き、森田（2006）と木村（2014）が主張している「視点」という観点に基づいて両言語の談話上の特徴を見ていく。森田（2006）は受け手の視点が日本語の発想の根源で、日本語で受身文が多用されるのも日本語の己の視点から事態を捉える受けの姿勢に由来すると指摘している。つまり、「られる」を用いることによって、日本語母語話者が常に己の視点を据えて、話し手を取り巻く周りの状況を受け止めるという受身の発想から発話しているのである。また、木村（2014）では、当事者的視点を取りがちな日本語話者は、「わが事」として事態を捉える傾向が強く、一方、事態認知において俯瞰的もしくは傍観者的な視点を取りがちな中国語話者は、「ひと事（他人事)」として事態を捉える傾向が強いとされている。

以上の先行研究に基づくと、日本語の一人称主語の受身文が中国語の三人称主語の能動文に訳される傾向が強いという現象は、両言語の談話上の特徴として以下のようにまとめられる。

（ウ）日本語話者は自分と外の世界と関係している事態を表現する際、常に自分に視点を置いて受け手の姿勢で言葉に反映するため、受身表現が容易に成り立つ。それに対して、中国語話者は日本語のように常に自分に視点に置く傾向もなく、受け手の姿勢で外の世界を捉えようとする傾向もなく、さらに中国語の「“被”構文」には被動作者が行為の結果として被る何らかの影響を明示的に表現しなければならないという意味的制約が存在するため、日本語の受身文から「“被”構文」に直訳することが難しく、事態を能動文で表現するのが最も自然である。

5. まとめ

本稿では、中日・日中対訳データを中心に、その対応関係と人称の分布を調査し、さらに調査結果から両言語の談話構成の違いについて分析を行った。その結果、会話データにおいては、中国語の原文でも中国語の訳文でも、日本語の受身文に対応する中国語表現のうち、半数以上が中国語の能動文であった。また、人称分類の分析によって、日本語では受身文の主語を一人称にしようとする傾向がみられるが、中国語ではそのような傾向がみられないことが明らかになった。さらに、中国語から日本語の受身文に翻訳されたデータに基づく調査 1 では、一人称主語の割合は 3.0%から 26.5%へと増加している一方、日本語の受身文から中国語に翻訳されたデータに基づく調査 2 では、一人称主語の割合は 54.8%から 24.8%へと減少している。最後に、中国語の能動文と対応する日本語の一人称主語の受身文を分析することによって、日本語と中国語の談話構成上の特徴をそれぞれ以下のようにまとめることができる。

受身文が選択される日本語の談話上の要因：

A. 一人称を主語に立てる、即ち「自己の視点」を中心にする傾向が強いため。

B. 主節と従属節の主語を一致させる、即ち「視点の一貫性」の規則が働いているため。

受身文が選択されない中国語の談話上の要因：

C. 自分に視点を置いて受け手の姿勢で言語を表現する傾向が強くないため。

D. 「“被”構文」には意味的制約があるため。

もっとも、上で述べた日本語と中国語の談話上の違いは、いうまでもなく程度問題であり、同じ事態に対して受動態で表現するか、能動態で表現するかのどちらかしか言えないという絶対的違いではない。中国語にも「我的论文被钮奇教授夸奖了（私の論文がブロフェッサーニューキに褒められてるの）」というような被害と結果を表さなければならないという意味的制約に違反している例が見られる。日本語の非情物主語の受身文はヨーロッパ言語の文法の影響のもとで発達してきたと言われている [8]ように、中国語の「“被”構文」は英語の文法に影響され、多用されるようになりつつある可能性もあると考えられる。この点の検討については今後の課題としたい。

参考文献

飯嶋美知子（2007）「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究－中国語母語話者への教育の一環として－」『早稲田大学日本語教育研究』10 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.17-30

大河内康憲（1983）「日・中語の被動表現」『日本語学』4 月号 明治書院 pp.31-38

木村英樹（1992）「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』1992 年 6 月号 内山書店 pp.10-15

木村英樹（2014）「こと・こころ・ことば―現実をことばにする『視点』」唐沢かおり・林

徹編（2014）『人文知 1 心と言葉の迷宮』東京大学出版会 pp.97-117
金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164 日本語学会 pp.1-14
工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学4』むぎ書房
久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
杉村博文（2016）「汉语第一人称施事被动句的类型学意义」『世界汉语教学』2016 年 01 期 北京语言大学 pp. 3-15
中川裕志（1997）「複文における因果性と視点―計算機で処理できるもの、できないもの―」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版 pp.77-117
福地肇（1985）『新英文法選書 10　談話の構造』大修館書店
森田良行（1995）『日本語の視点 ことばを創る日本人の発想』創拓社
森田良行（2006）『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房
刘月华・潘文娱・故韡（著）片山博美・守屋宏則・平井和之（訳）（1991）『現代中国語文法総覧（下）』くろしお出版
刘月华・潘文娱・故韡（2001）『实用现代汉语语法（增订本）』商务印书馆
陆洁（2004）『由日中对照看日语的被动表达的使用』上海外国語大学硕士论文
渡邊亜子（2000）「『視点』再考：中国語の『視点』を表す言語形式」『調布日本文化』 10 田園調布学園大学　pp.212-224

注

[1] 本稿では「中日対訳」は中国語を原文とし日本語訳を持つ対訳データを指し、「日中対訳」は日本語を原文とし中国語訳を持つ対訳データを指す。

[2] 受身文の数を数える際には、主節、連体修飾節に関わりなく、否定文や「テイル」文が併せて使用されている用例もすべて含めて調査した。なお、「サセラレ」文は調査の対象外とした。

[3] 本研究における中国語の文法用語は、刘ほか（1991 ; 2001）と飯嶋（2007）に基づいている。「能動文」とは主語が述語で表す動作の動作主であり、基本的に中国語の「SVO」の語順になっている文である。「“被”構文」とは、中国語の受身のマーカー「被，给，叫」などの介詞が述語動詞の前に用いられる文のことである。「語彙レベルの受身文」とは実質的な受身を表す動詞である「遭遇，遭受，受，受到」などが使用されている文である。「意味上の受身文」とは動作の受け手を主語の位置に置き、述語をその後に置くが、受身を表すマーカーが付加されない文である。「使役文」とは「叫，让，使」を用い、使役者が文の主語として表れ、被使役者が「叫，让，使」の目的語になる文である。それ以外の対応パターンはすべて「その他」に分類している。

[4]「不定の主語」とは「有人」（ある人）、「人家」（あの人）といった不定の人称で主語を表す文を指す。

[5] 査読の過程で（3）a の中国語を、（3’）a のような訳し方ではなく、より自然な日本語に訳すべきという指摘を受けたが、ここでは日本語としての自然さを問題としているのではなく、中国語に馴染みのない人の理解の便宜のために直訳を付している。（7’）a と（8’）a についても同様である。

[6] 久野（1978）では、「視点の一貫性」は、「単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んではいけない」（久野 1978 : 136）と定義されている。

[7] 中国語の「“被”構文」は受身文の主語に立つ対象にとって不愉快あるいは被害的な事柄を表すのに用いられるのがほとんどである、と従来指摘されている（大河内 1983、刘ほか 1991 ; 2001）。

[8] 金水（1991）は新しいタイプの非情物主語の受身文は日本語の表現の類型を拡張し、また日本語のニヨッテ受身は西洋語の翻訳の中から生まれた文型であり、受身文の意味的類型の拡張に有効に働いたと主張している。